

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年5月30日現在

機関番号：28003

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K15965

研究課題名（和文）困難事例を抱えるイマドキ看護大学生のピアサポート効果の検討

研究課題名（英文）Study on effect of peer support for nowadays nursing students with difficult cases

研究代表者

平上 久美子（Hirakami, Kumiko）

名桜大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：00550352

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）： 深刻な困難状況を抱えても他者には知られたい複雑な心理と、一方で自ら乗り越えようとする力を秘め持つ“イマドキ”大学生の一面が明らかになった。同じような悩みを持つ大学生同士によるピアサポートとして、私たちが学生と取り組んできた語り場は、悩みや考えを気軽に本音で語りあえる場として、大学生活やメンタルヘルスの改善に寄与できることが示唆された。活動はさらに、多様な性と性別に焦点化した語り場や、マッサージを取り入れた会などへと広がり、社会資源の少ない地域での需要が明確になりつつある。大学生は語り場への参加体験を経て、同じように孤独に悩む人をなかまに迎える、他者のサポーターへ変容することも示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

“イマドキ”大学生の複雑でわかりにくい困難状況とともに、学生主体の語り場の意義、さらに大学生をサポートしようと苦悩する大学職員の状況などが明らかになったことは、学生サポートを考える教職員や関係者への貢献となり、学生・教職員の枠を超えて連携・協力してより良い大学環境をつくることの示唆を得たと考えている。さらに、主体的にボランティア活動を行なっている学生が教員に求めるのは、相談役割であることから、学生主体で、かつ世話係的に教職員が関わる必要があるといえる。他者の健康支援職を目指す看護大学生が、正課活動に居場所が見出せず、進退や存在に深刻な課題を抱える状況は、看護教育の再考の契機といえる。

研究成果の概要（英文）： Nowadays nursing College students have complex psychology that they don't want others to know even when they have serious difficulties. On the other hand, it became clear that they had the power to overcome themselves.

We have worked together with university students who have similar problems to create a place for peer support. It was a place where they could talk frankly about their worries and thoughts. It was suggested that it could contribute to the improvement of their university life and mental health. It have also spread to storytellers focusing on SOGI and to groups that incorporate hand massage. The need for such activities in resource-poor areas was clear. It was also suggested that university students would transform themselves into supporters of others who welcome those who suffer from loneliness in the same way.

研究分野：看護教育、精神看護学

キーワード：語り場 メンタルヘルス ピアサポート 看護大学生 イマドキ大学生 協同

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

看護学生は他者の健康支援職を目指す一方、発達障害、アディクション、家族問題、うつ傾向、多様な性に関する悩み、さらには自殺企図など自らの深刻なメンタルヘルスの問題を抱える学生も少なくない。しかし、沖縄県北部地域には学生が気軽に相談・対話できる社会資源がなく、学内外の相談機関や医療機関にもつながらないまま、学業生活の継続が困難となる学生もある。このことから、メンタルヘルスを専門とする教員や大学保健センターと連携しながら、個人情報の厳守をルールとして、ほぼ月に1回2時間、語り合いの場“語れない想いのBar(場)”を開催してきた。学生による学生のためのメンタルヘルス支援としてのピアサポート活動である。日常から切り離された場だからこそ、参加者それぞれの悩みや生きづらさの想いを語り合い共有できる安心の場となっているが、このような喫緊の現状を明らかにし、その効果的支援について実証された報告はなく、このようなことが明らかになることは、学生と教員双方にとって有効であることが推測された。学生自身や家族、友人に深刻な問題を抱え、本人の意に反して学業生活が立ち行かなくなる学生や、本来の役割を超えて解決できない学生の相談や対応を抱え、心身のバランスに影響の出る教員らに早急に有効な方法が求められる現代において、モデルを提示できるなど意義のある取り組みではないかと考えた。

2. 研究の目的

看護学生の問題特性を明らかにするとともに、今後予定している自己尊重や自己効力感の向上(楽しむ場)、知識やスキルなどの対処能力の体得(学ぶ場)も含めて、Bar(場)の意味や参加者への効果等を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

国内外の関連文献の調査により、大学生のメンタルヘルス問題への効果的支援を中心にレビューを行なった。現在教員や大学保健センターと連携しながら学生が主体となって自主的に活動している“語れない想いのBar(場)”プロジェクトについては、毎回のアンケート結果の分析と、参加者を対象とした半構造化面接による活動の意味や効果の検証を行なった。研究については、実践哲学や協同学習の専門家らの助言も受けながら取り組み、さらに学外からの参加者や同様の活動を行なっている専門家などへのインタビューも行い、活動の意味の多角的検討に取り組んだ。以上の調査・研究を統合し、モデル化を目指した。

4. 研究成果

1900年代初めに欧米から始まったピアサポート活動は、国内外で一定の効果が認められている。国内では1900年代後半から小中学校を中心に導入されている、大学におけるピア活動は学習支援を中心に活用されている状況である。メンタルヘルスにおける学生による同活動の報告はほとんどない。しかし、ピアが現代の大学生のメンタルヘルスの一つの鍵であることが指摘されはじめ、実践報告が散見される現在である。私たちが学生とともにほぼ毎月開催した語り場については、深刻な状況にあっても誰にも相談していないことが語られたり、語り場が安心や満足感を提供し、孤独の軽減やお互いの変化につながっていることなどがわかった。これは、私たちが併せて行なったイマドキ大学生の調査でも確認された。さらに大学保健センターなどと連携し、多様な性に焦点化した語り場や、マッサージを取り入れた会も学生主体で始めたことで、学生は多様な性に関して表出し語り合える場を切望していることもわかった。同時に気軽に相談・対話できる社会資源が少ない沖縄県北部地域においては、大学生だけにとどまらず高校生や社会人なども同様の状況にあることが参加者らの状況から推測され、活動の重要性が示唆された。

以上のような活動に関して、毎回のアンケートや、開催の主体となっている学生や参加者などを対象にしたインタビューなどの分析から、その意味や効果を継続的に探究しているところである。研究は質的研究や看護教育、協同学習、哲学などの専門家とも協同して取り組んでおり、関連学会にて順次報告しているが、研究の進捗が全体に遅れたものについては、現在継続研究に取り組むとともに、学会等への投稿に準備を進めているものである。

以上のように、深刻な困難状況を抱える学生でも、自ら乗り越えようとする力を秘め持っていることや、そのためには仲間と協同することや、そのような大学環境を整えたりサポートする教職員の存在が関係することも見えてきたところである。

また、活動はA大学内だけでなく、他大学や専門学校で開催する機会をいただき、参加者からは、A大学での開催と同様の反響があったことなどから、活動の意義がA大学だけに特化されたものではないことが推測されている。

今後の課題は、現在取りまとめ中の研究などから、モデルを提示し、大学環境にとどまらず社会に拓かれて学生・教職員が活動していけるようになることだと考えている。

5. 主な発表論文等

平上久美子,大城凌子,鈴木啓子,鬼頭和子(2017),大学生生活の継続における“イマドキ”看護大学生の特徴と有効なサポート - インタビューを通して明らかになったこと -,名桜大学総合研究26号,pp.45-56

鬼頭和子,鈴木啓子,平上久美子(2017),精神看護実習においてマッサージを実施した看護学生

の体験, 名桜大学総合研究 26 号, pp21-29.
鈴木啓子, 鬼頭和子, 平上久美子(2017), ハンドマッサージ中の健康な成人の姿勢と視線および
ハンドマッサージをめぐる認識 観察および面接調査を通して, 名桜大学紀要 22
号, pp. 91-99.
鬼頭和子, 鈴木啓子, 平上久美子(2017), 精神科病院長期入院患者へのビフレンディングの効果
の検討, 名桜大学紀要 22 号, pp. 71-78.
平上久美子, 大城凌子, 鈴木啓子, 鬼頭和子(2018), “イマドキ” 大学生の大学生活に対応する大
学職員のサポートの現状, 名桜大学総合研究 27 号, pp. 47-61.
鬼頭和子, 鈴木啓子, 平上久美子(2018), 院内看護研究活動を支援する師長の困難と大学教員に
よる研究支援後の変化, 名桜大学紀要 23 号, pp. 33-41.
平上久美子, 鬼頭和子, 鈴木啓子(2019), 精神看護実習における看護学生の実施する触れるケ
アの現状 学生へのアンケートから明らかになったこと, 名桜大学総合研究 28
号, pp. 91-104.

〔雑誌論文〕(計 7 件)

平上久美子, 鈴木啓子, 大城凌子, 鬼頭和子(2016), “イマドキ” 看護大学生が大学生活を継続す
るために教員に求めるサポート - インタビューを通して -, 第 42 回日本看護研究学会学術
集会.
鬼頭和子, 鈴木啓子, 平上久美子(2016), 医療従事者を対象としたメンタルヘルス研修の考察
ハンドマッサージによる体験型研修の効果, 第 26 回日本精神保健看護学会学術集会.
鬼頭和子, 鈴木啓子, 平上久美子(2016), 看護研究活動を支援する師長の困難と大学教員に求め
る支援の検討, 第 21 回日本看護管理学会学術集会.
鈴木啓子, 平上久美子, 鬼頭和子(2016), ハンドマッサージを受けた健康な成人の身体と視線
観察および面接調査を通して, 第 42 回日本看護研究学会学術集会.
嘉数結菜, 土屋芽衣, 比嘉綾香, 満名心, 平上久美子(2016), 臨地実習中において看護学生が「泣
く」ことに関する研究 - 看護学生へのグループインタビューを通して -, 第 42 回日本看護
研究学会学術集会.
土屋芽衣, 嘉数結菜, 比嘉綾香, 満名心, 平上久美子(2016), 精神科病棟で看護学生が企画するレ
クリエーションの場の意味, 第 42 回日本看護研究学会学術集会.
満名心, 土屋芽衣, 嘉数結菜, 比嘉綾香, 平上久美子(2016), 統合失調症を抱える当事者の病の体
験プロセスに関する研究 - 闘病記における世界観に着目して -, 第 42 回日本看護研究学会
学術集会.
比嘉綾香, 満名心, 土屋芽衣, 嘉数結菜, 平上久美子(2016), 統合失調症者とともに家庭生活を継
続する家族の体験プロセス, 第 42 回日本看護研究学会学術集会.
平上久美子, 安永悟, 鈴木啓子, 鬼頭和子(2016), 教養科目授業を大学生とともに創る意味 授業
学生の振り返りに焦点をあてて, 日本協同教育学会 第 13 回大会.
下地紀靖, 平上久美子, 鶴巻陽子, 西田涼子(2016), 看護大学生が自ら積極的に関わったボランテ
ィア活動経験に関する研究, 第 36 回日本看護科学学会学術集会.
平上久美子, 備瀬雄一, 新垣陸, 比嘉真子(2017), 多様な性と生を生きる大学生による大学生のため
のピア学習活動の意味, GID 学会第 19 回研究大会.
Ryoko Nishida, Kumiko Hirakami, Noriyasu Shimoji, Ryoko Oshiro(2017), Meaning of
experiences of volunteer activities in which students of a nursing college proactively
participated, 第 3 回国際ケアリング学会学術集会.
比嘉真子, 藤原いずみ, 伊志嶺香奈, 長谷部里奈, 戸高友布, 平上久美子(2017), 大学生同士の語り
場を開催する学生の体験プロセス「語れない想いの Bar」にまつわる記録の分析より, 第 43
回日本看護研究学会学術集会.
戸高友布, 比嘉真子, 藤原いずみ, 伊志嶺香奈, 長谷部里奈, 平上久美子(2017), 友人とわかり合お
うとした大学生の体験に関する研究, 第 43 回日本看護研究学会学術集会.
伊志嶺香奈, 長谷部里奈, 戸高友布, 比嘉真子, 藤原いずみ, 平上久美子(2017), 大学生のレジリエ
ンス向上に関する文献検討, 第 43 回日本看護研究学会学術集会.
長谷部里奈, 戸高友布, 比嘉真子, 藤原いずみ, 伊志嶺香奈, 平上久美子(2017), 誰にも話せなかつ
た重要なことを人に話す大学生の体験の意味, 第 43 回日本看護研究学会学術集会.
鈴木啓子, 鬼頭和子, 平上久美子(2017), 精神科急性期治療病棟におけるハンドマッサージの取
り組み, 第 43 回日本看護研究学会学術集会.
藤原いずみ, 伊志嶺香奈, 戸高友布, 長谷部里奈, 比嘉真子, 平上久美子(2017), 複数回の入院をし
た精神障害者の家族の心理に関する文献検討, 第 43 回日本看護研究学会学術集会.
Kumiko Hirakami, Keiko Suzuki, Kazuko Kito, Ryoko Oshiro(2017), The meaning of
activities on the university campus as mental health support of students, by students,
for students, TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017.
Keiko Suzuki, Kito Kazuko and Kumiko Hirakami (2017), Hand-massage engagements for
patients hospitalized in Japanese psychiatric wards, TNMC & WANS International
Nursing Research Conference 2017.

Kazuko Kito, Keiko Suzuki and Kumiko Hirakami(2017),Nurse Students' Experiences in Giving Massages to Patients as Touching Care in Psychiatric Nursing Practice, TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017.

平上久美子,土肥いつき,ほんまなほ,新里美智子,鈴木啓子,鬼頭和子,大城凌子(2017),大学生同士から探究のピアへの変化 - 『多様な性と生を考える学習活動三丁目』が多様なサポーターと協同する意味 -, 日本協同教育学会第 14 回大会.

平上久美子,鈴木啓子,鬼頭和子,大城凌子(2017),イマドキ”大学生が生き活きと大学生活を送るために有効なサポート - 教職員への調査を通して -, 第 37 回日本看護科学学会学術集会.

平上久美子,ほんまなほ,土肥いつき,新里美智子,大兼久友香(2018),輪になってつながる「多様な性と生を考える学習活動三丁目」の取り組み, GID 学会 第 20 回研究大会.

平上久美子,安永悟(2018),新設看護専門学校における LTD 基盤型授業導入の効果 - 集中講義前後のアンケート調査の比較から -, 日本協同教育学会第 15 回大会.

平上久美子,鬼頭和子,鈴木啓子(2018),精神看護実習において看護学生が実施する触れるケアの意味, 日本統合医療学会山陰支部第 3 回学術大会.

〔学会発表〕(計 26 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

フクロウの会『語れない想いの Bar』<https://www.facebook.com/groups/911794798892755/>

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:鈴木 啓子

ローマ字氏名:Keiko Suzuki

所属研究機関名:名桜大学

部局名:健康科学部

職名:教授

研究者番号(8桁):60224573

研究分担者氏名:大城 凌子

ローマ字氏名:Oshiro Ryoko

所属研究機関名:名桜大学

部局名:健康科学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：80461672

研究分担者氏名：鬼頭 和子

ローマ字氏名：Kazuko Kito

所属研究機関名：名城大学

部局名：健康科学部

職名：上級准教授

研究者番号（8桁）：90714759

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。